

〔論 文〕

「本因坊名人引退碁観戦記」から小説『名人』へ

—川端康成と戦時下における新聞のメディア戦略—

福田 淳子

What Triggered Kawabata to Write *The Master of Go*:
Wartime media and the last Honninbo championship match

Junko FUKUDA

The novel *The Master of Go* was published in 1952 after 10 years' preparation by Yasunari Kawabata. In this novel he focuses on Shusai, a master of go, twenty-first in the Honninbo succession, who died in 1940. In 1938 the *Tokyo Nichinichi Shimbun* (now *The Mainichi*) and the *Osaka Mainichi Shimbun* sponsored the last Honninbo championship match and Kawabata was invited to report on the fourteen sessions in sixty-four serial installments. After Shusai's death he was moved to write the novel, and based it on these reports.

This paper looks at Kawabata's writings, the history of old *iemoto* succession system, the dramatic defeat and the death of the old champion, the wartime popularity of the game, strategic actions by the media, and concludes that the novel symbolizes Shusai's death as emblematic of a dying culture and the change from pre-modern to modern Japan.

Key words: Yasunari Kawabata (川端康成), *The Master of Go* (『名人』), the last Honninbo championship match at go (本因坊名人引退碁), watching report (観戦記), media strategy (メディア戦略), wartime newspapers (戦時の新聞)

1. はじめに

囲碁の世界、特に本因坊秀哉名人にスポットを当てた小説『名人』^{注1}は、川端康成の代表作として評価も高く、川端は『千羽鶴』『雪国』よりもくより多く愛着があるし、より多く満足してゐる^{注2}と述べ、自身が好んでいた作品の一つである。戦中から戦後にかけて何度も書き直され、長い年月をかけて複雑なプロセスを経て書き継がれた作品であり、その成立事情を顧みても愛着の深さが窺い知れる。また、囲碁という、ある意味で特殊な世界を舞台にした作品であるにもかかわらず、サイデンステッカーが『雪国』『千羽鶴』『山の音』に続く四作目として英訳をして以来、10カ国語以上の翻訳本が出版

されており、世界的にも知られる作品となった。

『名人』は、当時64歳の本因坊秀哉が引退碁において木谷実に敗れた、その長い対局を描いた作品である。これは、昭和13年に「東京日日新聞」・「大阪毎日新聞」に独占掲載された「本因坊名人引退碁観戦記」（以後、「引退碁観戦記」と略記）を素材として書かれており、この川端自身による実録の存在を忘れるわけにはいかない。川端がこの観戦記を担当しなければ『名人』は成立しなかったとも考えられ、観戦記そのものが重要な意味を持つのである。

『名人』研究については、今村潤子「『名人』研究史」^{注3}、近藤裕子「名人」^{注4}、細谷博「『名人』研究史」^{注5}等が先行研究をまとめているものの、松坂俊夫が改稿が多いためか、批評の対象とされるこ

との少ない作品^{注6}と述べてから40年近く経った現在でも、研究はあまり進んでいない。囲碁の歴史と本因坊秀哉の生涯を詳述し『名人』について考察した岸田正吉「「名人」私論〈川端における秀哉像の定着〉」（「指向」麻布学園国語科有志、昭和57年1月）はあるが、「引退碁観戦記」については、『名人』の素材として、小説が成立するまでの創作過程の考察などがいくつかあるのみで、「引退碁観戦記」そのものに関しては言及がなされていない。「引退碁観戦記」と『名人』との比較にしても、充分になされているとは言い難い。

本稿では、このような研究の現状を鑑み、近藤（前掲）が指摘する〈同時代の言説の中にテキストを解き放ってゆく〉ための試みとして、「引退碁観戦記」の掲載が昭和13年、すなわち支那事変当時の新聞というメディアであったことに注目し、引退碁が持つ意味や川端が観戦記を担当することになった経緯など、同時代的な事実関係を整理し、『名人』執筆に至るまでの背景を考察する。

2. 「本因坊名人引退碁観戦記」

本因坊秀哉名人引退碁は、昭和13年6月26日に東京芝で行われた打ち始め式を皮切りに、箱根や伊東と場所を変えながら12月4日まで約半年間にわたって全14回行われた。8月15日から約3カ月間は名人の病気のため休戦し、11月18日から再開された。「引退碁観戦記」は「東京日日新聞」・「大阪毎日新聞」の夕刊に、昭和13年7月23日から9月6日までと、11月30日から12月28日まで、64回にわたって独占掲載され、川端の文章とともに、呉泉（呉清源）六段の解説と棋譜が同時に掲載された。中断に伴う休載期間中には、川端を含む関係者による「本因坊引退碁大座談会」（9月7日～16日）（全集未収録）が掲載され、対局再開の予告記事も何度か出された。つまり、実際の対戦とは約1カ月のズレをもって、しかも対局が継続する中で、観戦記は新聞に掲載されたことになる。終局掲載のあとに、川端、本因坊、木谷の順で「後記」を掲載、最後に本因坊の「総評」が続いて連載は幕を閉じた。

完結した「引退碁観戦記」は、川端の生前におい

て、自身のどの刊本にも収録されることがなかった。最初に「引退碁観戦記」全文を収録したのは毎日新聞社刊行『本因坊戦全集 別巻』（昭和45年11月）であった。

この全集は別巻を含めて全7巻からなる和綴じ本で、『本因坊戦全集』の題字は川端の筆である。別巻には「引退碁観戦記」の他に、川端・本因坊・木谷の「後記」、本因坊秀哉の「総評」、休載期間中の「本因坊引退碁大座談会」、リーグ戦で問題になったコミ碁を批判した加藤信「コミ碁の不合理」（「東京日日新聞」・「大阪毎日新聞」昭和13年1月20日）、「名人引退碁記録・予選譜」、「本因坊戦文献集」等を収録する。

その後「引退碁観戦記」は、川端没後に刊行された三十七巻本『川端康成全集 第二十五巻』（新潮社、昭和56年8月）に、他の観戦記など囲碁に関する文章や、『名人』のプレオリジナルとともに、漸く収録された。「引退碁観戦記」が〈単行本にもならず、数次の川端康成全集にも未収のまま〉（『本因坊全集別巻』前掲）であったのは、川端生前のことであるから、川端自身の意思が働いていたと考えられる。小説として『名人』を成し得たあとの素材としての観戦記は“作品”と見做さなかったのか、あるいは囲碁界の記録として文学とは別扱いをしたかったのかとも考えられる。しかし、川端康成の筆名で新聞掲載され、観戦記として多くの読者に読まれたことは事実であり、単なる素材としてではなく、川端の著作物として位置づける必要はある。生前に全集に収録・刊行されなかったこととあわせて、川端個人の刊本よりも先に『本因坊戦全集』に、しかも特別扱いの別巻に収録されたことの意味を考える必要がある。

「引退碁観戦記」の単行本収録の際の異同については以下の二点を指摘しておく。

『川端康成全集 第二十五巻』（前掲、以下『全集第二十五巻』と略記）の「解題」によると、

本全集では、著者が丹念に加筆してある発表紙の切抜帖が現存してあるので、本文はすべて、これに拠って作成した（但し、今日までのところ、第二回目

と第六十二回目とは不明である。)／なほ、最近では『本因坊戦全集』の別巻(昭和四十五年十一月三十日、毎日新聞社刊)に、全文収められたことはあるが、本文はすべて発表紙のままである。著者はこの観戦記を、生前自らの単行本に収めることは、つひにしなかつた。(傍線筆者)

とあるが、『本因坊戦全集 別巻』(前掲、以下『別巻』と略記)の「凡例」の「1」には、〈原文と異なっている部分は、今回、川端氏自身により加筆修正されたものである〉(傍線筆者)との記載があり、初出のままではなく川端の手が既に入っていたことが分かる。『全集第二十五巻』「解題」の〈本文はすべて発表紙のまま〉ではないことになる。『全集第二十五巻』「解題」には初出紙との校異があり、切抜帖が反映されているようだ。『別巻』と初出紙とを比較すると、まず棋譜の横(筋)の表記が初出紙では「いろはにほへと…」が用いられ、『別巻』では「1 2 3 4 5 …」と算用数字に置き換えられているため、それに伴う変更が見出しや本文中にあるほか、その他の表記の修正も若干見受けられる。川端の切抜帖が反映された『全集第二十五巻』と『別巻』とを比較すると、『全集第二十五巻』ほどの変更はないが、『別巻』には僅かの修正があるようだ^{注7}。

また、初出紙との本文異同の問題に加えてさらに注意すべきは、新聞にとって重要な役割を果たすと考えられる“見出し”の扱いである。『別巻』には見出しはそのまま付けられているが、『全集第二十五巻』では見出しは全て削除されているのである。見出しの省略や数字による章立て等が、全集等の収録時に初出から変更されることは他の作品にも見られることである。「引退碁観戦記」は前述のとおり川端没後の収録であることから、見出しの削除は全集編集者の判断であると考えられるが、解題ではこれについて何も触れていない。この削除により、初出である新聞記事の一部としての観戦記は、違った性質のものに成り変わったとも言える。

3. 本因坊名人引退碁と「引退碁観戦記」

名人の引退碁とは、いかなる勝負で、どのような

意味があったのか。囲碁の歴史と本因坊の由来について略述する。

「“本因坊”の由来と歴史」(『別巻』収録)によれば、1578年日蓮宗の日淵が京都寂光寺を開き、その弟子日海は堺の仙也に碁を学び、彼の腕前を認めていた織田信長は入洛後にしばしば召し出し“名人”と呼んでいた。これが碁における名人の起こりであると言われている。寂光寺にはいくつかの塔頭があり、そのひとつ“本因坊”に日海が住んでいたことから彼を“本因坊”と呼ぶようになり、やがて家元の名称から戸籍名になったという。

増川宏一『碁 ものと人間の文化史 59』(法政大学出版局、昭和62年12月)によれば、中国から伝来したとされる囲碁は日本では8世紀には既に天皇や僧侶によって興じられており、10世紀になると貴族、13世紀には武士にも広まり、16世紀頃には庶民の間でも興じられるようになる。江戸時代になると徳川家康は京都から江戸に本因坊(算砂)を頻繁に招いており、慶長17(1612)年には本因坊は初めて専業の棋士として最高の扶持を受けた。これは〈前例のない画期的な措置〉であり、〈幕府によって遊芸の一つの部門として認知された〉ことを示すものとしてその意義は大きく、〈本因坊の棋力による功績も少なくなかった〉と述べる。また、家康は四家(本因坊、安井、井上、林)を家元とし、承応3(1654)年以降には寺社奉行の管轄下に名人碁所を設置し、碁打の最高位として家禄を支給した。そのため、碁所の地位をめぐる激しい争奪戦が展開され、囲碁の水準を大きく上げることにもなったという。このように名実ともに囲碁界をリードし、歴史を引き継いできたのが本因坊家であった。

『別巻』(前掲)の前書き「名人引退碁・ほか」には、引退碁の意味が次のように説明されている。

毎日新聞社(当時は東京日日新聞、大阪毎日新聞の両社)はかねてから碁将棋界の世襲制の家元や名人の地位など、古い伝統的な形態は、近代的な選手権戦の中に昇華されるべきである、という基本的な考え方を持っていた。／昭和十年、将棋名人戦がまずスタートし、ついで十一年、本因坊秀哉名人、日

本棋院との間に次の契約がまとまった。秀哉名人が最後の手合（勝負碁）をして引退する、本因坊家は世襲制を廃す、両社は秀哉名人に引退金を支払い、本因坊の名跡は両社に譲渡される、両社は本因坊戦の棋譜の独占掲載を条件に、日本棋院に本因坊の名跡を再譲渡する、というものである。（中略）／その月のうちに準選士六段トーナメントが開始され、六月には選士六人のリーグ戦に移り、十三年四月、引退碁の挑戦者は三十歳（数え年）の木谷実七段に決定した。

つまり、毎日新聞はそもそも囲碁・将棋の世襲制など古い伝統的な形態はやめて、実力主義の近代的な選手権制にするべきだという考えを持っていた。秀哉名人はこの勝負碁をもって引退し、本因坊という世襲制であった家元を廃止し、秀哉名人に引退金を支払うことによって本因坊の名跡は毎日新聞に譲渡する、毎日新聞は本因坊戦の棋譜を独占掲載し、それを条件に日本棋院に本因坊の名跡を再譲渡する、という内容だ。

この毎日新聞の提言を秀哉名人は受け入れた。対局終了後の翌年昭和14年6月12日付で第二十一世本因坊秀哉・門下一同の名で本因坊家世襲制廃絶に関する「声明書」（『別巻』掲載）が出され、約300年伝承されてきた本因坊の名跡は、日本棋院（大正13年創設）に、また碁譜の掲載権は毎日新聞に委譲され、本因坊戦という名のタイトル戦が誕生することになった。今日も継承されている本因坊戦はこの本因坊秀哉の引退碁を契機に開始されたのであり、名人引退碁は囲碁界における歴史的な大転換を意味していた。

第二十一世本因坊秀哉名人は、この引退碁以降、江戸時代初期から代々続いていた世襲制の本因坊家を絶家とし、全日本専門棋士選手権戦（いわゆる本因坊戦）の優勝者に“本因坊”の名跡を継がせていくことに踏み切った。この契約が昭和11年にまとまり、毎日新聞社は秀哉名人の決意を受け、日本棋院と協力して選手権戦を主催することになった。本因坊家にとっては最後の勝負であり、また秀哉名人にとっては勝敗の如何に関わらず最初から引退を掲げていた一局でもあった。本因坊秀哉がこのような

決意に踏み切ったことの根幹には、大正13年7月に日本棋院が発足して以来、実質的な家元としての権力を既に失っていたこと、つまり家元制度の弱体化が理由の一つとしてあったようだ^{注8}。名人を継いでから三度の勝利をおさめ、不敗の名人として輝かしい経歴をもっていた秀哉名人の対戦相手を決定するために、昭和12年1月からまず9名の六段によりトーナメント方式で2名を選抜し、昭和12年6月から13年4月まで六段の2名が4名の七段とリーグ戦を行い、勝ち上がって優勝し挑戦者に選ばれたのが木谷実七段だった。

このような歴史的意味を持つ対局については「東京日日新聞」に掲載された予告記事が詳細に説明している。昭和13年6月24日の3面では、やや左寄りの中央に四角で囲った6段抜きで、「本社独占豪華棋譜 “名人引退碁” 愈々開戦」と2行にわたる横書きの見出し、さらに縦書きで「鬼才・木谷七段と／本因坊名人対局／解説呉六段一観戦記川端康成」という大きな見出しで大々的に報道された（傍線筆者）。

明治、大正、昭和三代にわたって名実ともに棋界の王者として五十年不敗の記録を誇つてゐた第廿一世名人本因坊秀哉氏はいよ〜本社独占の『一世一代の引退碁』によつてその輝ける『最後の勝負碁』を打つべく挑戦者決定を待つてゐたが、一ヶ年半に及ぶ選士リーグ戦の結果鬼才木谷実七段の登場となり、こゝに来る廿六日から棋界空前の大決戦を開始することとなつた、今回の手合は棋界未曾有の大勝負であることおよび本因坊名人が老齡であることなどを考慮し後世に残る名棋譜を生み出すため棋界のあらゆる慣例を破つて対局条件の完璧を期し持時間も各々四十時間、合計八十時間とし約四日間に一回の割で対局、対局者は一定の場所に宿泊する缶詰制度を原則としたほか封じ手を採用したが、名人が封じ手を行ふことは棋史始まつて以来の新機軸で、いかに神聖にして厳正な大決戦であるかがうかがひ知れるわけである。（中略）特に今回は終局を待たず手合の進行中に連日囲棋欄に発表するがこの名局の解説は木谷七段の好敵手であり、且本因坊名人ともゆかり深

い天才棋士呉泉六段が担当し新鮮にして鋭利なる戦評を試みる筈でこれに対して観戦記をものするのは文壇の驍将川端康成氏で、新鮮で尖鋭な文章をもって新観戦記文学を樹立することに決定した【対局は一切参観を許さず】東京日日・大阪毎日新聞社（「東京日日新聞」昭和13年6月24日）

本因坊秀哉が名人になってから不敗を守っていたこと、その対戦相手として一年半におよぶリーグ戦で木谷実七段が選ばれたことに加え、これまでに経験のない新しい条件と多くの特例が採用されたことを説明している。

川端はこれらの囲碁の変革を、後年の『名人』では芯に据えて物語を展開する。すなわち対局初日に行われた碁の打ち始め式は引退碁のほかには例がなく（九章）、〈缶詰め制〉は一局の碁が終わるまで棋士が対局場を離れないようにし、第三者から助言を受けることを防ぐためであるが、これは〈人格の尊敬を失ったこととも言へる〉（十一章）と記す。また〈封じ手〉は打ち掛けの手を相手に隠すことを意味し、缶詰め制と同様に勝負の公正さ・厳正さを守る方法としてつくられた規則だが、こうした合理主義は〈道としての碁の伝統が尊んだ〉名人から〈芸としての碁の品や味を思ふゆとり〉を奪ったとする（十二章）。さらに、名人の年齢を配慮した特別な措置として、持ち時間が通常の倍の40時間に設定されるが（十七章）、これは対戦の長期化を招いてより過酷な状況を生み、結果的に名人の入院に繋がったとも言える措置であった。

本因坊秀哉名人は不敗とはいえ、晩年の十年余りで勝負碁を三度しか行っておらず、いずれも病気で中断し、結果的には勝利していたため不正の噂もあった。したがって後進の棋士たちは、名人のわがままを防ぐためにも、厳重な対局条件で対戦させようと決めたようだ。しかし川端は『名人』において、新しい制度について触れながら、新旧の時代の境目に立たされた最後の名人、伝統と近代化のせめぎ合いの狭間で悲劇のうちに亡くなった名人としての秀哉を描くことになる。

「名人引退碁」は、囲碁界にとっても「東京日日

新聞」・「大阪毎日新聞」にとっても歴史的な大イベントであり、その観戦記を担当することになった川端は〈新鮮で尖鋭な文章をもって新観戦記文学を樹立する〉ことを期待されたわけである。前述したように、打ち始めから約一か月遅れで観戦記の掲載が開始し、実際の対局が続いている中で観戦記が連載される状況での執筆であり、川端は〈名人引退碁といふやうな大切な勝負だし、まだ終局してゐないのだから、迂闊なことは書けない。（中略）始終危つかしい、いはば腫れものに触るやうな、薄氷を踏むやうな、思ひが私にあつた〉（「碁の観戦記を書いて」^{注9}）、あるいは〈勝負が終つてから観戦記を書いたのではなくて、対局中に執筆するので、私は棋士のことを書きながら、次の打ち継ぎにはまたその棋士に会はねばならない。それが幾度もくりかへされる^{注10}〉と書いていた。本因坊名人引退碁が、囲碁界の革新に加え、本因坊秀哉の引退、この二つの意味を担った特殊な対局であることから、観戦記もまた特殊な意味を帯びたのは当然である。名人の年齢を配慮して持ち時間が通常の倍に設定され半年が費やされることになったことも、観戦記の内容に少なからず影響した。

「引退碁観戦記」は〈一回が原稿紙三枚半ばかりで、新聞の連載小説と同じ字数であつた。したがつて、かなり詳しい記録ともなつた〉のであり、他の観戦記とは異なる特別扱いであった。しかし、〈実際書き出してみると、あり余つて、一日二手平均くらの棋譜にも、私の観戦記がおくれがちだつた。紙面が足りなくて書き残したことも少くなかつた〉、〈もし両棋士と共に箱根の宿に泊り込んで、対局の間の休みの日の動静をも写生してゐたなら、この棋だけで数百頁の本が書けただらう〉（「碁の観戦記を書いて」前掲）などとも書いており、実際には掲載されなかつた部分がかかなりあつたようだ。

〈観戦記とその記者は従、碁と棋士とが主であつて、観戦記の成功不成功は、その記者が碁を尊重する度、棋士に傾倒する度によるところが多い。記者の感動が読者をとらへるものだ〉という自覚と、〈そのころの私は碁を愛好して、碁界の消息にも興味を持ち、観戦には好奇心ばかりではなく、熱意が

働いたのであった。十四五回の打ち継ぎを盤側で見て、棋士の風貌、表情、動作、言葉などを丹念にノートした^{注11}。その強い関心と熱意が、『名人』執筆への道を切り開いたとも言えよう。

川端は、「引退碁観戦記」執筆のために記録した事柄を『名人』執筆にも生かし、〈忠実な記録小説と言へるかもしれない〉〈しかし、小説としては記録の要素が多く、記録としては小説の要素が多い^{注12}〉と書いており、先行研究においてしばしば引用されてきた発言である。例えば、約三カ月の休載を経て再開した11月30日と12月1日の二日間は、「世紀の棋戦最高潮」のタイトルにそれぞれ「砲門ふたたびひらく」「生命線に立つ」という大見出しで【序章の一】【序章の二】として、退院した名人の様子や木谷が対戦者として決まるまでの経緯、『名人』にも反映された名人の言葉や呉清源の挿話など、棋譜もなく文章のみで掲載されている。

先行研究において「引退碁観戦記」と『名人』との比較に最も多く紙面を割いた川嶋至^{注13}は、初出紙と該当する『名人』の文章とを比較しながら創作意識を探ろうとし、万人に理解できるよう表現が具体的にしていることなどを指摘するが、連載に課せられた制限などを考慮すれば、比較はそう簡単ではない。しかし、「引退碁観戦記」は通常の分量よりも多い特別扱いの観戦記であり、純粋な勝負の記録にとどまらず他の事柄も多く書き込まれている。従ってむしろ、『名人』に対する川端の言葉は逆に解釈することもできる。つまり、“観戦記としては小説の要素が多く、小説とするには観戦記の要素が多い”と言い換えてもよいところではないか。その意味では、予告の〈新観戦記文学〉としての役割を果たしたとも考えられる。

名人引退碁は坊門の断絶を意味する最後の大勝負であり、碁の近代化を意味していた。それらの重みを意識し、名人の孤独や痛みを感じながら、また対戦者である木谷実にかかる重圧をも意識しながら、責任と覚悟のすべてを引き受けて書かれたものが「引退碁観戦記」であった。新聞の読み物として読者を意識するのはもちろんのこと、囲碁の勝負を中心に据え、対局中の棋士たちを気遣いながら、公平

かつ客観的な立場を貫く必要があったのである。

4. 囲碁・文壇・新聞の関係

このような囲碁界の歴史的転換に、新聞社は強く関わっていた。大衆に絶大な人気のある碁を空前絶後のエポックメイキングな観戦記つきで独占掲載する計画は、それにより発行部数を増やす効果が大いに期待されていた。いわゆるメディア戦略である。

以下、福井逸治「メディア論としての将棋「名人」考(上)」(「大阪千代田短期大学紀要」35 平成18年12月)の考察に従えば、そもそも囲碁や将棋の報道が「新聞」というメディアに登場したのは、明治25年、黒岩涙香が「万朝報」を創刊してからだという。「万朝報」はそれまでの論説本位の大新聞・通俗的な雑報本位の小新聞にはない、近代的なジャーナリズムの基礎を築こうとしていた。そのためには経済的基盤、つまり購読者の拡大が急務であり、そこで考えられたのが将棋の記事だった。囲碁・将棋は本来、庶民のものであり、新聞読者の大衆化とともに紙面に登場した。単なる技術の解説や講評だけでなく、対局者の人間性や人生観に踏み込む記事が望まれた。そのためには、書き手の優れた筆力と洞察力が必要とされたことは言うまでもない。したがって、連載小説等で新聞と結びつきを強めていた人気作家や文学者、著名な人気作家などが書き手として擁立された。その草分けが幸田露伴だったが、露伴のころはまだ観戦記の連載は開始していなかった。メディアと囲碁・将棋の関係が強まるのは、昭和10年代だという。

『別巻』(前掲)の前書き部分や、「引退碁観戦記」、『名人』の十一章、十二章にも記されているが、囲碁よりも先に将棋界において実力制への転換が図られる。福井(前掲)にも指摘があるが、名人世襲制を批判的に見ていた「東京日日新聞」主筆の阿部真之助と将棋連盟顧問の中島富治が連携して関根名人に退位を促し、江戸時代以来の世襲名人制を廃止して実力制とする方向に話を進め、リーグ戦で優勝者を名人とする実力名人戦が開始されることになる。

将棋界の近代化をいわばメディアが先導して推進し、囲碁の世界でもまた本因坊を実力で決める方式

を日本棋院と「東京日日新聞」・「大阪毎日新聞」が協力して開始したのが名人引退碁だった。その名人世襲制から実力制への変革を記念する対局の観戦記に抜擢されたのが川端だった。川端は当時 39 歳、前年 6 月には『雪国』が創元社から最初の単行本として出版され（同年、文芸懇話会賞受賞）、人気・実力ともに知られるところでもあった。

この観戦記を川端が担当したことは、新聞と文壇との関係の深さと同時に、囲碁・将棋が新聞というメディアを通して作家あるいは文壇と深い関係にあったことを物語っている。また、当時「東京日日新聞」の学芸部長を務めていたのは就任したばかりの久米正雄であり、菊池寛も客員を務めていた。久米や菊池の引きがあったことは想像に難くない。

『毎日新聞七十年』（毎日新聞社、昭和 27 年 2 月 1 日）によれば、

十三年四月十三日の取締役会で、病氣中の杉山幹氏の東日主幹を解いて編集局顧問を委嘱した。それに伴って阿部真之助氏（東日総務）が東日主幹となり、高田元三郎氏（東日副主幹兼学芸部長）が東日総務となり、小説家の久米正雄氏が東日学芸部長となった。／久米氏はそれ以前から東日学芸部顧問をしていたが、この異色の人事は阿部氏の提案であった。阿部氏は千葉亀雄氏の後を継いで東日学芸部長（昭和八年五月）となって以来、特に文壇との接触に努め、菊池寛氏をはじめ知名の作家、随筆家を顧問その他の名で相次いで迎えた。そのため一時の東日学芸部は、まるで文壇人クラブの観を呈し、したがって、東西の学芸面はかつてない生氣にあふれて好評を博した。

とある。また『「毎日」の 3 世紀—新聞が見つめた激流 130 年（上巻）』（毎日新聞社、平成 14 年 2 月）によれば、毒舌家として知られた阿部真之助が昭和 8 年に学芸部長に就任すると、〈弱体だった学芸欄立て直しのため、菊池寛、久米正雄、横光利一、吉屋信子、大宅壮一、高田保、木村毅といった文壇、論壇のそうそうたる人材を社友、顧問として迎え入れ〉、〈阿部部長の下で新生学芸面がスタートしたほか、将棋名人戦や囲碁本因坊戦も始まるなど東日学芸部

は一時代を築いた〉ともある。同誌には「川端康成の名作「名人」は毎日観戦記から生まれた」という文章が 1 ページを使って掲載されており、冒頭には、

囲碁や将棋のファンにとって、新聞に掲載される棋譜は大きな楽しみであり、それが人気・実力棋士同士の対局であればあるほど見逃せないものになる。それだけに新聞社は昔から大タイトル戦などでは棋譜と合わせて掲載する観戦記の筆者に有名作家ら起用、筆の力でファンをさらに引きつけようと努力してきた。

と記されている。

しかし有名作家が観戦記を担当するにしても全く囲碁の分からない作家が担当できるわけではなく、当時の文壇における囲碁熱について川端秀子は『川端康成とともに』（新潮社、昭和 58 年 4 月 10 日）に次のように記している。

昭和十三年と言えば、本因坊秀哉名人と木谷実七段の対局があった年で、川端は観戦記を引き受け、文字通り「忠実な」仕事をしました。新潮社版三十五巻本全集の第二十五巻に、はじめてその観戦記をのせて頂きましたので、『名人』が書かれる前の仕事ぶりがよくわかるようになりました。これを機会に専門の棋士の方と熱海や軽井沢で対局をして頂くこともあって生来碁好きの主人はとても楽しかったようです。（中略）／大森時代には直木三十五さんがいいお相手でしたし、桜木町時代には文人囲碁会というのができてその試合で一等をとったこともあります。会長が菊池寛さん、発起人が豊島與志雄、三木清、倉田百三、室伏高信という方々でした。文壇で初段を一番早くとられたのが村松梢風さん、それから豊島與志雄さん、その次が川端だったと思います。／鎌倉へ来てからのお相手は野上彰さん、それに小林秀雄さんや大岡昇平さんとも打ったことがあったと思います。

「文人囲碁会」は昭和 13 年 4 月に菊池寛を会長として発足しており、文人囲碁会のメンバーの一人で新聞の観戦記を担当したこともある坂口安吾は、〈豊島さんも川端さんも、定石型の紳士ではない腕

力型の独断家なので、お二人の文学も実際はそういう風を読むのが本当だと思うのである〉、〈豊島、川端、村松三初段は全然腕に自信がなくて至って、鼻息が弱いのだが、倉田百三初段の鼻ッ柱は凄いもので、この自信は文士の中では異例だ〉、〈豊島、川端先生など、碁そのものは喧嘩主義だが勝負自体に就ては喧嘩精神は旺盛ではないようで、文人的であり、尾崎と僕の二人だけが素性が悪いという感じである〉などと書いている（『文人囲碁会』『坂口安吾全集 17』ちくま文庫、平成2年12月）^{注14}。

『本因坊全集』の観戦記を見ると、火野葦平、梅崎春生、尾崎一雄、大岡昇平など多くの作家が担当している。しかし、前述のとおり引退碁は特別な意味を担っていたこともあり、川端の「引退碁観戦記」は分量も多く、別格の風格と味わいを持つ。雑誌「囲碁春秋」の編集長で「本因坊引退碁大座談会」（前掲）にも出席していた安永一は〈流麗な筆致はこの対局にさらに錦を添えるものであって、満天下囲碁ファンを魅了しつくした。観戦記の数も多いが、近來の名文として観戦記中の白眉とされたものである〉（『囲碁五十年』時事通信社、昭和30年11月）と記し、野上彰は〈しばしば新聞の囲碁欄に観戦記を執筆されたが、重厚な名文である。ことに本因坊秀哉名人と木谷実の最後の名人の対局の観戦記は川端先生の苦労もさることながら、じつにみごとな筆で、これはぜひとも一冊の本にしてほしいと心から願っている〉（『囲碁太平記』河出書房新社、昭和38年12月）と書く。

ちなみに川端は、名人引退碁の観戦記を書いた功勞によって、日本棋院から初段を贈られ、昭和28年に二段、30年に三段、昭和38年に「秀哉賞」が設けられたときから選考委員を務め（「囲碁クラブ」昭和47年7月）、その年に四段、46年に五段、翌年没後に六段を追贈されている。

5. 戦時下における囲碁と川端

増川（前掲）によれば、東京都内の碁会所の数は大正9年から昭和10年にかけての15年間で13.6倍の981か所に増え、大正後半から昭和初期にかけて囲碁の愛好家が急増したものの、戦時色が濃くな

るにつれてブレーキがかけられ、戦局が激しくなると棋士たちは戦争に碁を役立たせるよう協力を強要されるようになったという。昭和12年の日華事変後、翌13年4月には日本棋院の棋士たちによる慰問が開始、14年には囲碁将棋の海軍慰問団を中国に派遣、15年には囲碁報国のための奉納連碁を開催して棋譜を明治神宮に献納、16年には産業報国会に準じて棋道報国会が結成されている。

当時13歳の少年棋士として慰問に参加した藤沢秀行は『勝負と芸一わが囲碁の道』（岩波新書、平成2年1月）で次のように記している。

一番記憶に残っているのが、昭和十三年の中国行である。／皇軍慰問団と称し、囲碁と将棋で総勢十名。碁は安永一さんが団長。安永さんは日本棋院の編集長をやめ、『囲碁春秋』という雑誌の主幹をつとめていた。（中略）上海まで船で行き、揚子江を漢口までのぼり、南京を回って上海に戻る一ヵ月半の旅だった。武漢三鎮を占領するなど、日中戦争が激しさを増していたころである。漢口ではピューンと鉄砲の玉の音があちこちで聞こえたりもした。下士官集会所や病院で指導碁を打つのだが、将校集会所にも呼ばれることがあった。

名人引退碁が実施された昭和13年は、まさに囲碁の戦争協力が開始された時期にあたっていた。川端らが所属する文人囲碁会もまた巻き込まれ、川端はいわば文壇と囲碁の両面から戦争に接近していくことになる。「引退碁観戦記」の掲載が始まる直前7月半ばには予定されていた東京オリンピックの中止を発表、戦時体制が強化されて国家は総力戦体制に入っていた。日中戦争の激化に伴い、中国で活動する軍隊への供給も厳しくなり、経済的にも戦時体制化が図られていった。「引退碁観戦記」が掲載されていた新聞紙面は連日戦争報道がなされていたが、このような状況下での囲碁観戦記がどのように掲載されていたのか。以下に一部を引用する。なお、見出しは初出紙（『東京日日新聞』）から、本文は『全集第二十五巻』（前掲）からの引用である（傍線筆者）。

- 「木谷の鋭鋒 果然爆弾を投ずる！」(8月7日)
要所を敵に許した黒は、またもやここに三たび、盤上無二の大場、白四八を覚悟の上で、左辺に鉄壁の長城を築いて、白を封鎖し、果然、黒四九と攻撃に転じた。木谷七段の鋭鋒が、やうやく現れて来たか。白は難関に遭遇するか、黒四九の爆弾に対し、名人の応手はいかに？
- 「白包围さる 木谷の攻撃愈々鋭し」(8月12日)
名人の病気も心配だが、盤上の接戦も心配だ。友軍との連絡を断たれ、敵の包围に陥った白の一団は、生か死か。
- 「急湍は渦巻く！ 木谷戦車隊中央に突入」(12月16日)
木谷七段のいふ「驚天動地」、呉六段のいふ「大きい変化」は、今日の譜面に現れた。□三三以下、当り当りと、ぐんぐん押して行く黒は、敵陣の真只中へ戦車隊が突入した武者振りだ。誰がこのやうな急転を予想したらうか。立会ひの岩本六段も嘆じた通り、ただ実戦の勢ひ、勝負の気合であった。両棋士の呼吸も荒く、急湍が渦巻くと見る間に、どつと滝津瀬となつて、ここに落下したのだ。
- 「敵中の伏兵生還 再び中原に戦塵上る」(12月20日)
今になつても、三七から四五と六本連なつた黒の厚みが働いて、右方の独立部隊を掩護してゐるのだ。また、黒六五に九九など、前にもう一役果して、敵陣中に立ち枯れの捨石と見えたのが、これも今になつて、味方の突入を待つ伏兵のやうに動き出し、手を携へて生還したのは木谷七段の面目かと驚く。

前述したとおり、『全集第二十五巻』収録時に見出しはすべて削除されているのだが、観戦記は新聞社が大々的に報ずる歴史的な一大イベントとして、新聞記事としての重要な役割を担っているのであり、読者を引きつけるための見出しには大きな意味があったはずである。引用部分は戦闘の比喩が極端な例であり、戦時を意識した過激な表現がなされていることがわかる。換言すれば戦争報道満載の紙面に見

事に溶け込んだ表現とも言える。見出しはおそらく新聞社側が付けたものと考えられるが、内容とかけ離れているわけではない。囲碁は勝負であるから対戦には違いないし、〈攻撃〉や〈敵の包围〉といった表現があっても不思議ではないが、〈爆弾〉や〈戦車隊〉等の言葉は戦争を意識したものであることは間違いないだろう。前述したように、川端康成全集に収録の「引退碁観戦記」解題によればこれらの本文には川端の意思が含まれていることになり、新聞というメディアを意識した上で、川端が時局に乗じた表現を用いたと考えてよいだろう。これらの表現は小説『名人』にはまったく見られない。

「引退碁観戦記」の解説を担当していた呉清源(呉泉)は、天才少年として昭和3年に14歳で来日し、当時24歳だった。昭和9年、日中関係が悪化する中で日本への帰化を決意し、本名の呉泉を“ゴ・イズミ”と読ませて日本名として使用する(昭和15年には呉清源に戻している)。昭和11年の秋頃、呉は一週間に二局を打っており、多忙のせいで体調を崩し、翌12年6月に長野県の富士見高原療養所に入所する。心身ともに苦しんでいた時期であった。引退碁の解説は、東京日日新聞の担当記者で当時の囲碁ライター鴻原正広が療養所を週に一度訪れ、呉が棋譜を見て解説するのを筆記して川端のもとに運び、川端はその解説を読んで観戦記の中に挿入する方法を取っていた^{注15}。川端は観戦記執筆中の8月19日に富士見高原療養所を訪れ、観戦記再開後の二回目(12月1日【序章二】「この碁を呉氏はどう見る」)にその時の様子を〈真夏の富士見療養所での話〉として書き、『名人』二十九章にもこのことを書いている。

日本に帰化したとは言え、祖国中国と日本に挟まれ、戦争が激化する報道を見聞きすることに胸を痛めたであろうことは想像に難くない。川端は、観戦記には呉をあくまでも解説者として淡々と記すが、後に「読売新聞」に41回にわたって「呉清源棋談」(昭和28年8月19日～12月7日)のち『呉清源棋談・名人』(文芸春秋新社、昭和29年7月)に収録)を連載し、呉と会話をしながら中国における碁の歴史を辿り、その歴史の中に厳しい勝負の世界に生きる呉清源の姿を重ねている。日中関係が悪化する戦況の中で帰

化を決意した若き青年は、人生をかけて命がけて勝負に挑み続けた。歴史の狭間で名人引退碁とともに関わり、戦時をともに生き抜いた人物として、作家川端の心に深く入り込んでいたと思われる。敗戦後に新聞掲載された「呉清源棋談」は、『名人』と同様に一人の天才棋士を描いた文章として、重要な意味を持つ。最初の刊本は『呉清源棋談・名人』（前掲）であり、『名人』とともに収録されていることがその証左である。

昭和8年に呉は木谷実と協同して“新布石”を考案し、共著『囲棋革新布石法 星・三々・天元の運用』（平凡社、昭和9年）はベストセラーとなっている。また、同年に行われた本因坊秀哉名人と呉清源の記念碁で呉清源が新布石で戦うが、秀哉名人に妙手が出て二目勝ちしている。前述した秀哉名人の不正の噂はこの時のもので、『名人』十一章にも書かれている。この勝負は川端も観戦し、観戦記を書いている。本因坊秀哉名人、木谷実、呉泉（呉清源）の三人の組み合わせは、まさに因縁の組み合わせであり、メディア的にも格好の三人だったのである。

昭和13年8月24日付の各種新聞では内閣情報部が作家を漢口攻略戦に派遣することが報道され、選出された片岡鉄兵、菊池寛、久米正雄、佐藤春夫、吉屋信子ほか22名はペン部隊として、陸軍班は9月11日、海軍班は9月12日に出発し、海軍班は10月11日に帰国、陸軍班はそれぞれに帰国し、連日にわたって写真や従軍記などが掲載された。以下の観戦記の引用は、名人入院のため中断する直前の掲載の一部と、『名人』で対応する箇所引用である（傍線筆者）。

■「碁は無価値か 世評の不当を嘆く名人」（『東京日日新聞』昭和13年9月1日）

文壇からも二十余名が、陸海軍の漢口攻略戦に従軍することとなった。軍や政府と相応じてこのやうに多くの文学者が現地に観戦するといふことは、恐らく世界史上に未曾有の盛事であり、日本民族の新しい神話の誕生（片岡鉄兵君の言葉）ともならう。私も参加を希望しておいたけれども、不幸その選に漏れたらしい。もし従軍が許されたならば、多分こ

の名人碁の打継ぎは見られないだらうと、心残りであつたところ、今は静かに本局の成行も見届けられさうである。いづれ支那へ行く機会には私にもあらうが、しかし一文学者としては、従軍記を書くのも、碁の観戦記を書くのも、根本の気持には変りがない。／例へば、本局なども、今日の戦時にふさはしくない閑戯に耽ると見るなどは、皮相の短見であらう。昔から戦時には碁が流行るといふ。陣中で武人が碁をうった逸話は少くない。また、碁には天地自然や人生一或ひは戦争の理法が、悉く含まれてゐるといふ。まことにさうであらう。けれども、そんな理屈は抜きにして、ただ碁そのものを見ても、日本人の精神の象徴として私達が誇るに足ると信ずる。直木三十五氏は、最早死が近づいた時に、彼としては珍しく悲しい自伝小説「私」のなかで、「碁打ちは羨ましい。」といひ、「碁は、無価値といへば絶対無価値で、価値といへば絶対価値である。」と書いてゐるが、心魂の純潔な昇華として、私もその崇敬の美に打たれることがないではない。今度の戦争のために、碁が一層世間に榮えるか、一時衰えるか、それは知らぬけれども、この民族の大きい動きに際して、年少の碁士の碁風に、高遠な理想の復活こそは望ましいものである。

■『名人』（『川端康成全集 第十一巻』新潮社、昭和55年12月）

こんなにしてまで打たねばならないのか、いったい碁とはなんであらうかと、私は名人がいたましかつた。直木三十五が、最早死の近づいた時、彼としては珍らしい私小説の「私」のなかに、「碁打ちは羨ましい。」と言ひ、碁は「無価値と云へば絶対無価値で、価値と云へば絶対価値である。」と書いてゐるのを、私は思い出したりした。直木は梟と遊びながら、「お前、淋しい事ないか。」などと言つてゐると、梟はテーブルの上の新聞をつついてやぶる。その新聞には、本因坊名人と呉清源との争ひ碁が出てゐる。名人の病氣のために、打ち掛けのままになつてゐる。直木は碁の不思議な魅力と、勝負の純粹さを思つて、自分の大衆文学の価値を考へてみようとするが、「一さういふ事に近頃はだんだん飽いてきた。今夜の九時までに三十枚の原稿を書き上げなくてはならぬが、

もう午後四時すぎである。しかし私は何うでもいいやうな気がしてきた、一日位梟と遊ばしてくれてもいいだらう。私は自分の為にでなく何んなにチャアナリズムと係累の為に働いてきたか？そしてそれが如何に冷酷に私を遇したか？」直木は無理な書き死をした。私が本因坊名人や呉清源を初めて知ったのは、直木三十五の引き合はせだった。／直木の最後は幽鬼じみてゐたが、今、目の前の名人も幽鬼じみてゐる。(二十六章)

私が箱根から軽井沢へ帰ると、学校はみな夏休みなのに、この国際的な避暑地にも、軍事教練の学生隊が入りこんで、銃声が聞えた。文壇からも、私の知人や友人が二十人余りも、陸海軍の漢口攻略戦に従軍した。私はその人選にもれた。従軍しなかつた私は、昔から戦時には碁がはやると言ひ、陣中で武人が碁を打った逸話は少なくないし、日本の武道は芸道の心と流れ合つて、それが宗教的な人格にも通ひ、碁はそれをよく象徴してゐると、観戦記に書いたりした。(二十九章)

吉田秀樹は「川端康成、戦中から戦後への創作意識をめぐって—『名人』推敲を一手掛かりに—」^{注16}で「東京日日新聞」の同じ箇所を引用し、〈『名人』には吸収されなかつた〉、〈戦時下での作家の有り様については『名人』では完全に切り捨てられてしまった部分〉と指摘しているが、川端は『名人』の「二十九章」にも上記引用のとおり作家たちの漢口攻略戦への従軍について記し、〈観戦記に書いたりした〉とむしろ引用の形で明確に書き残している。しかし「引退碁観戦記」では従軍記と観戦記とを並べ置き、囲碁と戦争とを同一視して、直木三十五の〈無価値といへば絶対無価値で、価値といへば絶対価値〉をあえて引用している。一方『名人』では、直木三十五の言葉は碁と大衆文学の価値とを引き比べる形に書き換えており、戦争の記述は呉清源について記す別の章に分けて書いている。創作時の操作がよく分かる部分でもある。さらに、囲碁に焦点を当てることで「東京日日新聞」の記載にある〈この民族の大きい動きに際して、年少の棋士の棋風に、高遠な理想の復活こそは望ましい〉という部分には、

呉清源の姿を映し見ることもできる。『名人』の文章と比較すると、直木三十五の小説「私」の中で梟がつついて破る新聞に出ているのは本因坊名人と呉清源の対戦記事でもある。小説では二カ所に分離させたとは言え、囲碁に関して言いたいことは通底している。

川端と本因坊秀哉名人との出会いは引退碁以前に二回あった。つまり、名人が晩年に三度しか対局していない勝負碁を、すべて観戦していたのである。一度目は、「直木三十五と碁」(『文芸』昭和9年5月)にあるように、秀哉名人と雁金七段の歴史的対局を読売新聞の屋上で直木三十五とともに二日間にわたって観戦したときのことである。大正13年に日本棋院が設立されるが、雁金準一他数名が脱退して「棋正社」を立ち上げる。当時、読売新聞の社長だった正力松太郎はこの分裂に目をつけて、「院社対抗戦」を企画、本因坊秀哉名人対雁金準一七段により第一戦が行われ、一大センセーションを巻き起こした。『読売新聞八十年史』(読売新聞社、昭和30年12月)によれば、この対局は〈天下何人も熱狂的に待望しておりながらも絶対に対局不可能として断念していたものであった〉のを正力社長の手腕で企画を実現し、〈本社の発展のために大きなプラスをもたらしたばかりでなく、読者と大衆にこよなき慰安を与え、その上に長年の積弊と知りながらも一掃できなかった日本棋院の改革を一挙に断行して最高棋戦を大衆に開放し、棋道隆盛の道をひらき、専門棋士の生活向上にも資するところがあつた〉と書いている。観戦記は、河東碧梧桐、村松梢風、笹川臨風、菊池寛等が担当し、発行部数を一挙に伸ばしたという。雁金が時間切れで敗退した。

二度目は、「国民新聞」主催の本因坊秀哉名人と呉清源四段の対局で(昭和7年1月25日から2月8日まで15回連載)、直木三十五が1月27日に、川端が2月8日と9日の二日間にわたり観戦記を掲載している。昭和7年1月24日「国民新聞」では、「名人本因坊氏と呉清源四段対局 名人の詳細なる講評と共に愈々明日より掲載 異彩を放つ直木、川端両氏の観戦記」と大々的に予告された。同紙において、名人は継続して「名人指導碁」を担当しており、直

木三十五は連載小説を担当する売れっ子作家であった。川端はこの観戦記に〈名人の苦しげな息づかひ〉を聞き、〈名人を痛ましいと思つたのであった。(中略)名人の弱さを痛ましいと思つたのではない。その強さを痛ましいと思つたのである。精魂こめて打ち下す一石一著に、名人の強い鋭いすさまじい、精神力が現れて、冴え返つた爽かさと同時に、なんだか虚空に白刃の風を聞くやうなきびしい痛ましさを感じたのである〉と書いている。引退碁、および『名人』に描かれた秀哉名人に対する作家的視線は、既にこの時点で向けられていたとも言える。

本因坊秀哉名人との二度の出会いは、いずれも川端の印象に深く刻まれていたのである。引退碁以前の勝負を二度とも直木三十五と観戦しており、〈私が本因坊名人や呉清源を初めて知つたのは、直木三十五の引き合はせだつた〉(『名人』二十六章)とも書くように、本因坊秀哉・呉清源との運命的出会いは直木の導きによるものであり、囲碁と深く結びついた直木の存在は決して忘れることのできない大切な記憶であった。前出の直木三十五の大衆小説の件からも、病に冒されながら身を削るようにして小説を書き続けて死んでいった直木と、碁を打つことで命を縮めた名人とを川端は重ね見ていたはずである。「直木三十五と碁」(前掲)は、直木三十五(昭和9年2月24日没)の没後まもなく書かれたものである。

また、名人引退碁の三年後、つまり第二次世界大戦直前に、川端は満洲日日新聞の招きで満洲に行くことになる。「自作年譜」(『川端康成全集 第三十三巻』新潮社、昭和58年5月)の〈昭和十六年〉の項目には、〈春から初夏、「満洲日日新聞」の招きによつて、呉清源一行に加はり、村松梢風とともに満洲に行く〉とある。

川端秀子『川端康成とともに』(前掲)には、

[十六年] 四月には主人は満洲日日新聞の招きで満洲に行くことになっていたのでありますが、三月ぎりぎりまで熱海に居て、三月三十一日になってやっと、二人で東京駅から出発しました。(中略)主人の方は四月二日に神戸を発ち、下関で同行する村松梢風さんと落ち合い、朝鮮半島経由で新京に四日に着きました。

(中略)／四月五日、六日に最大の目的だった碁の大会をすませ、五日には在満洲の小説家(緑川貢、檀一雄、田中総一郎、北村謙次郎の皆さん)と座談会をやりました。

とある。川端秀子を書くとおり、昭和16年4月5日「満洲日日新聞」には、川端と村松梢風が〈四日午後十時十六分ひかりで新京に到着し〉、4月5日・6日に開催される満洲日日新聞・大連日日新聞、日本棋院・満洲棋院主催の「全満碁選手権大会」の観戦記を担当するとの予告記事があり、観戦記は4月6日・7日の「満洲日日新聞」に掲載されている(全集未収録)。また、7日午後6時から開催された呉清源と満洲の棋士中島三段との手合わせを川端が観戦したことが写真入りで紹介されている。この他、「川端康成氏を囲んで」という文学座談会の内容が掲載された(4月13日、15日、16日、18日)(全集未収録)。また9月には関東軍の招聘で満洲に行き、「満洲日日新聞」の9月5日・8日には、山本実彦・川端・大宅壮一・高田保らがペン部隊として大連や奉天ほか五都市で開催される講演会に出席することが報道されている。14日には写真入りで講演会の模様が紹介された。大連で放送、奉天とハルビンで講演の後、日米開戦の直前11月に帰国している。つまり、最初の満洲行きの第一の目的は囲碁による慰問であった。予定を延長してまで満洲に残って小説の材料を集めるために様々なところを見て歩くなど、川端にとって満洲行きは重要な意味を持っていた。そのきっかけがまた囲碁だったわけであり、特に戦時下における川端と囲碁、新聞との関係は、作家としての仕事と切っても切れない関係にあったことが改めて確認できるのである。

6. 「引退碁観戦記」から『名人』へ

複数の雑誌に発表されながら何度も書き継がれた複雑な成立事情や発表の経緯などから、また戦争を挟んで書き継がれたという経緯からも、『雪国』と『名人』はよく並記される。しかし『名人』が『雪国』と明らかに異なるのは、新聞というメディアに掲載された「引退碁観戦記」、つまり事実の記録を

もとに、川端自身が小説として再構成したということだ。「引退碁観戦記」では明らかに戦時に特有の表現が顕在化していたのであり、戦争を意識しながら書き進められていた。「引退碁観戦記」を素材に、戦中戦後に何度も書き直しながらかき継がれた『名人』は、その意味では川端の著作の中で最も戦争に寄り添った作品だとも言える。

次の引用は、「あとがき」^{注17}に記された川端自身の言葉である。

昭和十三年から十四年にかけて、本因坊秀哉名人引退碁の観戦記を東京日日新聞（現在の毎日新聞）、大阪毎日新聞に書いた時、私はこれをいつか小説風に書き直してみたいと思つた。小説風といふのは、「自分のものに」といふほどの意味である。なぜなら、観戦記には読者をひくための舞文も多く、感傷の誇張がはなはだしく、また対局中の紛糾など新聞には書けぬこともあつたからである。

『名人』が他の小説と異なる点は、フィクションでありながらも、名人引退碁という歴史上のイベントを素材とする以上、記録として事実を正確に書き残す必要があつたことだろう。「引退碁観戦記」では読者や時代を意識したために意識的に書き入れた〈舞文〉や対局の説明的部分、時局的表現など小説としては不要な部分があり、観戦記としての客観性を保つために書くことが許されない部分が多かつた。本因坊秀哉と木谷に対する批判的な表現や作家としての眼で深く入り込んだ人間観察に基づく心理描写などは自制された。フィクション化に際して、事実を浮かび上がらせる操作や現場で捉えた直感的・感覚的把握の掘り起こしが、むしろ役立つとも考えられる。事実に基づく深い洞察が小説の核となっていることは確かだ。

このように考えると、「引退碁観戦記」から『名人』へとフィクション化する過程で意識的に操作したと考えられる部分はいくつか指摘できるものの、事実の方が優位にあることも見えてくる。

『名人』の冒頭〈第二十一世本因坊秀哉名人は、昭和十五年一月十八日朝、熱海のうろこ屋旅館で死んだ〉の一文は、この世にはもはや存在しない名人

の位置づけとして、つまり終わりであって始まりであるという、「引退碁観戦記」とは一線を画するための重要な役割を果たしている。

「引退碁観戦記」が“川端康成”という名前で書かれている以上、記録者としての自己の存在をどう扱うかはフィクション化する上で最初の課題であつたであろう。〈私〉として登場する観戦記者は、七章から〈浦上〉という名で登場し、四十七章版『名人』の四十一章では〈浦上秋男〉というフルネームで登場する。この章には、「引退碁観戦記」を書いた功績により初段を贈られたことや観戦記を書く上での苦労話など、観戦記終局後にしか書けない真実が書き込まれている。〈浦上秋男〉が語ることで、川端が小説世界を構成しているのである^{注18}。しかし、この「四十一章」は四十七章版にしか収録されていない。四十一章版の「四十一章」は引退碁の翌々年、正月7日の稽古始めで久々に名人と会い、15日に熱海に来た名人夫妻に〈私〉夫婦が挨拶に行き、その翌々日に名人が亡くなる場面で閉じられている。

また、一章では〈名人と私との縁は、東京日日（毎日）新聞社が引退碁の観戦記者に、私を選んでくれたことから始まる〉と書くが、前述したとおり、昭和7年2月に「国民新聞」で既に本因坊秀哉名人と呉清源の観戦記を書いており、引退碁が名人との初めての出会いではなく、劇的な出会いを印象づけるための操作と考えられる。ところが、四十七章版の四十五章には、直木三十五が世話役をつとめた「国民新聞」の碁で観戦記を担当し、このとき〈名人や呉少年と初めて会つた〉と書いている。長い年月を経ることで、フィクション化の意識よりも余情の方が先行してしまったとも考えられる。

『名人』では、主人公である本因坊秀哉は本名で記し、対戦相手の木谷実は「大竹」に変更されており、本因坊秀哉名人が実在したという事実をクロスアップさせるための操作とも受け取れる。『呉清源棋談・名人』（前掲）の「あとがき」に、「〈名人〉は題名が示す通り主」〈名人を本名として相手の木谷七段は仮名としたのも、他意あつてのことではないが、この小説が作中の対局を必然に虚構して、迷

惑をおよぼすだらうといふ気持から、書きはじめた時に、故人の名人は本名のままにしたけれども、木谷七段は仮名を用い、その後これにしたがったままである」と記し、対局者である木谷実への配慮があったことを明かしている。川端はこのことを書簡によって木谷に直接伝えていた。

川端が自裁した直後の昭和47年7月号「囲碁クラブ」に、本因坊名人引退碁の対戦相手であった木谷実による「三通の手紙—川端先生の思い出」（「囲碁クラブ」昭和47年7月 全集未収録）が木谷実と川端の写真入りで掲載されている。「編集後記」には〈川端康成氏死去のニュースは日本中を驚かせましたが、棋界にもたいへんなショックでした。「本因坊秀哉名人引退碁観戦記」のころから棋界と縁が深く、秀哉賞選考委員でもありました。日本棋院新会館の特別対局室には、氏の筆になる「深奥幽玄」の掛軸がある〉と記されており、川端と親交の厚かった木谷に思い出話を依頼したとある。川端は折に触れて木谷に手紙を出しており、戦災で焼け残った木谷家宛ての川端書簡三通を紹介しながら、川端との思い出に触れている。その一通目は木谷の妻木谷美春宛てで、小説『名人』に関する内容である。以下に引用する（傍線筆者）。

過日は久しぶりでお目にかかれて楽しい思ひいたしました。（中略）／新潮八月号に、秀哉名人の事を引退碁を主として書きました。自然木谷さんに御迷惑を及ぼす事になりました。私の思ひちがひもまちがひも多いと存じます。御注意いただければ幸いです。八月号の分で全体の三分の一ほどです。／木谷さんには御不快の点もあらうと存じながら、私といったしましては一度書いておきたいものでした。おわび申上げても及ばぬ事です。／暑さおいたはり下さい。

書簡中の日付けは7月23日、消印は昭和26年7月25日とのことだ。文中に〈新潮八月号に、秀哉名人の事を引退碁を主として書きました〉とあるのは、「新潮」昭和26年8月号掲載の「名人」のことである。これは一章から十四章に該当する部分で、このあと「名人生涯」と題して「世界」（昭和27年1

月）に十五章から三十章、「名人供養」（「世界」昭和27年5月）と題して三十一章から四十一章に該当する部分を発表し、同年9月刊行の十六巻本『川端康成全集 第十四巻』（新潮社）に収録している。書簡中の〈全体の三分の一〉という記述から、「新潮」に掲載された昭和26年7月の時点で、そのあと「世界」に発表された三分の二は書き上がっていたであろうことが推測できる貴重な資料でもある。対局当時のことや、川端が鎌倉の自宅と対局場（箱根・伊東）、軽井沢の職場とを移動していたこと、川端が小野田千代太郎と対戦して快勝したことに触れたあと、作中で木谷だけが仮名にされて他の関係者は実名であることを指摘し、〈もとより名人が主人公であり、そちらに焦点をおかれたため、対戦相手である私のほうには、つい筆の足りない部分も生じた。家内に宛てた手紙で、先生は、私が不快な想いをしたり迷惑をしたらうと、心配して下さっているわけです〉と説明し、〈正直なところ、あの小説を読んだ直後、私がまったく平静であったとはいえません。すべてが真実だと思われてはたまらない——そう考えたのは確かです。しかし、あれはあくまでも小説であって、実録ではない。大竹七段は木谷実ではなく、川端先生がつくり出した小説の中の人物なのです。その後、雑誌新潮の「書いた人・書かれた人」という企画で、川端先生と対談する機会があり、そのときの私には、もう少しもわだかまりなどありませんでした〉と書いている。

木谷実が川端を許したのは、川端が囲碁とともに、棋士の人生を受け止め、深く理解していたからだろう。『名人』は、やはり川端自身の囲碁との関わりによって成功へと導かれたと言える。

7. おわりに

以上のように、観戦記における川端は、秀哉が運命を歩む姿を眺めていた。一方、『名人』の作者としての川端は、運命を受け入れる秀哉を描いた。メディアで大々的に報道された引退碁は、単なる一棋士の引退碁ではなく、囲碁界の、それも単なる勝負碁ではなく芸道としての囲碁の歴史的転換と川端は捉えていた。つまり、前近代から近代への大転換で

あり、それに伴う一つの世界の喪失という、厳しい芸道の死滅を表してもおり、その象徴が本因坊秀哉名人だった。川端が本因坊秀哉名人に見ていたのは、そのような時代の狭間でもがき苦しむ、滅び行くものの姿であった。川端は『名人』の中で本因坊秀哉を決して美化してはいない。実力で勝ち上がってきた新時代の代表である木谷実との勝負に破れ、まさに一つの時代が終わりを告げた。引退碁の解説を引き受けた呉清源もまた名人と大勝負の経験があり、木谷実ともまた好敵手であり“新布石”という新しい流れを生み出していた。中国から帰化した呉清源に対しては、祖国との狭間で苦悩した一人の人間として、また本因坊秀哉と同様に囲碁に生涯をかけた天才として、川端は特別な眼差しを向けてもいた。

これらの新旧の三人が関わる引退碁を、川端はあくまでも新聞の読者を意識した報道として、観戦記者の立場で記録した。日中戦争が激化する昭和13年、同時代人の一人として戦争にも寄り添って書いた。しかし、「引退碁観戦記」には書けないものが多くあった。それを書き起こすためには、小説家としての立場に転換する必要があった。この大きなきっかけとなったのが、文字通り名人としての役割を閉じた、本因坊秀哉の死だったのである。

新聞各社は競い合って囲碁を販売戦略に利用してきたが、同時にそれは囲碁の近代化を推し進めることでもあった。戦時という特殊な状況下において、文壇も囲碁界も時代の要請に従い、その中に取り込まれていった。新聞はまた、作家たちを囲碁に取り込み、部数拡大の戦略としてきた。川端の「囲碁観戦記」はそのような時代を象徴する最大のイベント記録であり、成果でもあった。

しかし川端はこれを「観戦記」で終わらせることなく、秀哉の死をきっかけとして小説化を試みた。“川端康成”のネームバリューを利用した新聞の読者や時代の制約を離れ、記録は小説というもう一つの器に注ぎ込まれた。複雑な成立過程は小説家の創作への意志を物語っている。小説『名人』において川端は、戦時におけるメディアの要請に応じて川端自身が綴った素材を再構成し、主人公の敗北を「観戦記」以上に明白に炙り出した。それは川端にしか

成し得ないことであった。

【注】

注1 川端は本因坊秀哉名人を小説化するために、少なくとも四回の書き直しを行った。さらに章立てに違いが生じており、四十一章稿、四十七章稿という二種類の『名人』が存在する。詳細は以下のとおり。

◇単行本初収録 ◆全集初収録

※文庫本初収録 ▲プレオリジナル初収録

①「本因坊秀哉名人」（『囲碁春秋』昭和15年8月～10月 *病気のため三回で打ち切り）

②「名人」（『八雲』昭和17年8月）

③「夕日」（『日本評論』昭和18年8月、12月、19年3月）

④「花」（『世界文化』昭和22年4月）

⑤「未亡人」（『改造』昭和23年1月）

◇「名人」（『哀愁』細川書店、昭和24年12月）
②を収録。

◆「名人」（十六巻本『川端康成全集 第十巻』新潮社、昭和25年5月）②を収録。

⑥「名人」（『新潮』昭和26年8月）一～十四（四十一章のうちの一～十四）

⑦「名人生涯」（『世界』昭和27年1月）一～十六（四十一章のうち十五～三十）

⑧「名人供養」（『世界』昭和27年5月）一～十一（四十一章のうち三十一～四十一）

◆『名人』（十六巻本『川端康成全集 第十四巻』新潮社、昭和27年9月）

⑥⑦⑧＝四十一章

⑨「名人余香」（『世界』昭和29年5月）一～七（四十七章のうち四十一～四十七）

◇『名人』（『呉清源棋談・名人』文芸春秋新社、昭和29年7月）＝⑥⑦⑧（四十一章削除）＋⑨＝四十七章

※『名人』（新潮文庫、昭和37年9月）

⑥⑦⑧＝四十一章

◆『名人』（三十七巻本『川端康成全集 第十一巻』新潮社、昭和55年12月）

⑥⑦⑧（四十一章削除）＋⑨＝四十七章

▲『川端康成全集 第二十五巻』（昭和56年8月、新潮社）プレオリジナル①②③④⑤を収録

川端生前に刊行された初収録全集以外の全集・選集である十巻本『川端康成選集 第七巻』新潮社、昭和31年6月)、十二巻本『川端康成全集 第十巻』新潮社、昭和35年12月)、十九巻本『川端康成全集 第十巻』新潮社、昭和44年7月)は、すべて四十一章稿である。

先行研究において、四十一章稿と四十七章稿のどちらを定稿とするかの議論がなされてきた。筆者はそれぞれの稿が意義を持つと考えているが、本稿ではこれを議論の対象としない。

- 注2 「あとがき」(十六巻本『川端康成全集 第十五巻』新潮社、昭和28年2月)
- 注3 林武志編『川端康成戦後作品研究史・文献目録』教育出版センター、昭和59年12月
- 注4 羽鳥徹哉・原善編『川端康成作品研究事典』勉誠出版、平成10年6月
- 注5 羽鳥徹哉他編『川端康成作品論集成 第五巻』おうふう、平成22年9月
- 注6 (「名人」小考)『現代国語研究シリーズ12』川端康成』尚学図書、昭和57年5月、のち『川端康成「掌の小説」研究』教育出版センター、昭和58年10月)
- 注7 初出紙「東京日日新聞」・「大阪毎日新聞」と『本因坊秀哉全集 別巻』、『川端康成全集 二十五巻』、三者の精緻な比較検討が必要である。現在、部分的な考察で止まっているため、全体を通じた比較は今後の課題としたい。
- 注8 三谷水平「本因坊戦物語」(『本因坊戦全集 別巻』前掲)
- 注9 「文学界」昭和13年10月
- 注10 「あとがき」(十六巻本『川端康成全集 第十四巻』昭和27年9月)
- 注11 注10に同じ
- 注12 『呉清源棋談・名人』(文芸春秋新社、昭和29年7月)
- 注13 「川端康成の創作意識——観戦記から「名人」へ——」(「位置」昭和41年2月)
- 注14 深澤晴美「川端康成と囲碁—全集未収録文「坂田名人に捧げる」から遡って」(『川端文学への視界』28 銀の鈴社、平成25年6月)が、川端と囲碁について坂田栄男との関係から探っている。
- 注15 三谷水平「本因坊戦物語」(『本因坊戦全集 別巻』

前掲)、桐山桂一『呉清源とその兄弟』(岩波書店、平成17年4月)等を参照。

- 注16 「昭和文学研究」(昭和63年7月、のち『川端康成—東京のシルエット』龍書房、平成25年12月)
- 注17 注10に同じ
- 注18 観戦記者の名前については、谷口幸代「川端康成と浦上玉堂—『名人』論をめぐる—」(「人間文化研究年報」平成10年3月)に考察がある。

*引用中の旧字体は概ね新字体に変えた。／は改行を示す。

【付記】

本稿は、2012年11月3日に韓国の漢陽女子大学で開催された韓国日本近代文学会秋季学術大会での口頭発表の一部を加筆修正したものである。

(ふくだ じゅんこ 現代教養学科)